

6 L^p 空間

6.1 ノルム空間としての L^p 空間

- (X, \mathcal{E}, μ) を測度空間とする. このとき $1 \leq p < \infty$ に対して

$$\mathcal{L}^p(X, \mathcal{E}, \mu) = \mathcal{L}^p(X, \mu) = \left\{ f : X \rightarrow \mathbb{R} : f \text{ は } \mu\text{-可測で } \int_X |f|^p d\mu < \infty \right\}$$

とおく. まずこの $\mathcal{L}^p(X, \mu)$ が \mathbb{R} 上のベクトル空間となることを示そう.

- $f, g \in \mathcal{L}^p(X, \mu)$ とすると

$$|f(x) + g(x)|^p \leq (|f(x)| + |g(x)|)^p \leq 2^p(|f(x)|^p + |g(x)|^p)$$

であるので $|f + g|^p$ も X 上積分可能である, つまり $f + g \in \mathcal{L}^p(X, \mu)$ である. 定数倍については明らかである.

- 次にノルムを定めよう. $f \in \mathcal{L}^p(X, \mu)$ に対して

$$\|f\| = \left(\int_X |f|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}} \quad (6.1)$$

と定義する. このとき $\|f\|$ がノルムの3つの条件

$$(N1) \quad \|f\| \geq 0, \|f\| = 0 \Leftrightarrow f = 0$$

$$(N2) \quad \alpha \in \mathbb{R} \text{ に対して } \|\alpha f\| = |\alpha| \|f\|$$

$$(N3) \quad \|f + g\| \leq \|f\| + \|g\|$$

を示さなければならない.

- (N1) の前半は明らかである. 次に $\|f\| = 0$ としよう. このとき

$$\int_X |f|^p d\mu = 0$$

であるから $f = 0$ a.e. $x \in X$ が成り立つ. しかし $f = 0$ とは言えない. 実際 $N \subset A, \mu(N) = 0$ なる N の上で $f \neq 0$ であっても $\|f\| = 0$ となってしまうのである. この不都合を回避するために $\mathcal{L}^p(X, \mu)$ において

$$f \sim g \quad :\Leftrightarrow \quad f(x) = g(x) \text{ a.e. } x \in X$$

と定義すると \sim は同値関係になる. この同値類による商集合 $\mathcal{L}(X, \mu) / \sim$ を $L^p(X, \mathcal{M}, \mu) = L^p(X, \mu)$ と定義する. f の同値類を $[f]$ で表す:

$$[f] = \{g \in \mathcal{L}(X, \mu) : f = g \text{ a.e. } x \in X\}$$

として

$$\|f\| = \left(\int_X |f|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}}$$

と定義するのである。厳密には $L^p(X, \mu)$ の元は同値類であるが、「ほとんど至るといふ等しい関数は同じ関数とみなす」というルールを進めていき、 $\|f\|$ を $\|f\|_p$ と表すことにする。そうすれば $\|f\| = 0$ であれば f は 0 という関数と同一視できるので $f = 0$ とみなすことにより (N1) が成り立つことがわかる。

- 次に (N2) を示す。 $\alpha \in \mathbb{R}$ とすると

$$\|\alpha f\|_p = \left(\int_X |\alpha f|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}} = |\alpha| \left(\int_X |f|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}} = |\alpha| \|f\|_p$$

を得る。

- 次に (N3) であるが、 $p = 1$ のときは三角不等式 $|f(x) + g(x)| \leq |f(x)| + |g(x)|$ から明らかである。 $p > 1$ についてはいくつかの準備が必要である。

補題 6.1 (Young の不等式)

$p, p' > 1$ は $\frac{1}{p} + \frac{1}{p'} = 1$ を満たす数とする。このとき

$$ab \leq \frac{a^p}{p} + \frac{b^{p'}}{p'} \quad (a, b \geq 0)$$

が成り立つ。

証明

- $ab = 0$ のときは明らかなので $ab > 0$ とする。
- まず

$$x \leq \frac{x^p}{p} + \frac{1}{p'} \quad (x \geq 0) \tag{6.2}$$

が成り立つことを示す。そのためには

$$f(x) = \frac{x^p}{p} + \frac{1}{p'} - x$$

とおいて増減表を書けばわかる (演習)。

- (6.2) において $x = ab^{-\alpha}$ ($\alpha > 0$) とおくと

$$ab^{-\alpha} \leq \frac{a^p b^{-p\alpha}}{p} + \frac{1}{p'}$$

- 上式両辺に $b^{1+\alpha} > 0$ をかけると

$$ab \leq \frac{a^p b^{1+\alpha-p\alpha}}{p} + \frac{b^{1+\alpha}}{p'}$$

- ここで $1 + \alpha = p'$ とおくと $(1/p) + (1/p') = 1$ より $p = (\alpha + 1)/\alpha$ つまり $\alpha + 1 - p\alpha = 0$. したがって

$$ab \leq \frac{a^p}{p} + \frac{b^{p'}}{p'}$$

が成り立つ. \square

命題 6.2(Hölder の不等式)

$p, p' > 1$ は $\frac{1}{p} + \frac{1}{p'} = 1$ を満たす数とする. $f \in \mathcal{L}^p(X, \mu)$, $g \in \mathcal{L}^{p'}(X, \mu)$ とすると

$$\int_X |fg| d\mu \leq \left(\int_X |f|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}} \left(\int_X |g|^{p'} d\mu \right)^{\frac{1}{p'}}$$

が成り立つ.

証明

- $\alpha = \left(\int_X |f|^p d\mu \right)^{1/p}$, $\beta = \left(\int_X |g|^{p'} d\mu \right)^{1/p'}$ とおく.
- $\alpha = 0$ ならば $f = 0$ (a.e. $x \in X$) であり $\beta = 0$ ならば $g = 0$ (a.e. $x \in X$) であるから, $\alpha = 0$ または $\beta = 0$ のときは明らか. よって $\alpha \neq 0$ かつ $\beta \neq 0$ とする.
- Young の不等式において $a = \frac{|f|}{\alpha}$, $b = \frac{|g|}{\beta}$ とおくと

$$\frac{|fg|}{\alpha\beta} \leq \frac{|f|^p}{p\alpha^p} + \frac{|g|^{p'}}{p'\beta^{p'}}$$

である. $|f|^p, |g|^{p'}$ は積分可能であるから $|fg|$ も積分可能であり

$$\frac{1}{\alpha\beta} \int_X |fg| d\mu \leq \frac{1}{p\alpha^p} \left(\int_X |f|^p d\mu \right) + \frac{1}{p'\beta^{p'}} \left(\int_X |g|^{p'} d\mu \right) = \frac{1}{p} + \frac{1}{p'} = 1$$

よって

$$\int_X |fg| d\mu \leq \alpha\beta = \left(\int_X |f|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}} \left(\int_X |g|^{p'} d\mu \right)^{\frac{1}{p'}}$$

が得られる. \square

命題 6.3(Minkowski の不等式)

p は $1 \leq p < \infty$ を満たす数, $f, g \in \mathcal{L}^p(X, \mu)$ とするとき

$$\left(\int_X |f + g|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}} \leq \left(\int_X |f|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}} + \left(\int_X |g|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}}$$

が成り立つ.

証明

- $p = 1$ のときは三角不等式 $|f + g| \leq |f| + |g|$ から明らかであるので $p > 1$ とする. このとき $\frac{1}{p} + \frac{1}{p'} = 1$ となる $p' > 1$ が存在する. 実際 $p' = \frac{p}{p-1}$ である.

- また $\int_X |f + g|^p d\mu = 0$ のときは明らかなので $\int_X |f + g|^p > 0$ とする.

- まず

$$|f + g|^p = |f + g| |f + g|^{p-1} \leq |f| |f + g|^{p-1} + |g| |f + g|^{p-1} \quad (6.3)$$

- ここで $h = |f + g|^{p-1}$ とすると

$$|h|^{p'} = |f + g|^{p'(p-1)} = |f + g|^p$$

であるので $\int_X |h|^{p'} d\mu < \infty$ である. ここで $f, g \in L^p(X, \mu)$ ならば $f + g \in L^p(X, \mu)$ であることを用いた.

- Hölder の不等式より

$$\int_X |f| |h| d\mu \leq \left(\int_X |f|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}} \left(\int_X |h|^{p'} d\mu \right)^{\frac{1}{p'}} = \left(\int_X |f|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}} \left(\int_X |f + g|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p'}}$$

同様に

$$\int_X |g| |h| d\mu \leq \left(\int_X |g|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}} \left(\int_X |h|^{p'} d\mu \right)^{\frac{1}{p'}} = \left(\int_X |g|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}} \left(\int_X |f + g|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p'}}$$

- $\frac{1}{p'} = 1 - \frac{1}{p}$ に注意して (6.3) より

$$\int_X |f + g|^p d\mu \leq \left\{ \left(\int_X |f|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}} + \left(\int_X |g|^p d\mu \right)^{\frac{1}{p}} \right\} \left(\int_X |f + g|^p d\mu \right)^{1 - \frac{1}{p}}$$

- 両辺を $\left(\int_X |f+g|^p d\mu\right)^{1-\frac{1}{p}} > 0$ で割ると

$$\left(\int_X |f+g|^p d\mu\right)^{\frac{1}{p}} \leq \left(\int_X |f|^p d\mu\right)^{\frac{1}{p}} + \left(\int_X |g|^p d\mu\right)^{\frac{1}{p}}$$

を得る. \square

6.2 Banach 空間としての L^p 空間

定理 6.4

$1 \leq p < \infty$ に対して $L^p(X, \mu)$ は $\|\cdot\|_p$ をノルムとして Banach 空間となる.

証明

- $\{f_n\}$ を $L^p(X, \mu)$ の Cauchy 列とする: 任意の $\varepsilon > 0$ に対して $n_0 \in \mathbb{N}$ が存在して

$$m, n \geq n_0 \Rightarrow \|f_m - f_n\|_p < \frac{\varepsilon}{2} \quad (6.4)$$

が成り立つ.

- ある $n_1 \in \mathbb{N}$ が存在して

$$m, n \geq n_1 \Rightarrow \|f_m - f_n\|_p < \frac{1}{2}$$

- 次に $n_2 > n_1$ なるある $n_2 \in \mathbb{N}$ が存在して

$$m, n \geq n_2 \Rightarrow \|f_m - f_n\|_p < \frac{1}{2^2}$$

が成り立つ.

- このように $n_1 < n_2 < \cdots < n_{k-1} < n_k < \cdots$ なる自然数の列 $\{n_k\}$ が存在し

$$m, n \geq n_k \Rightarrow \|f_m - f_n\|_p < \frac{1}{2^k}$$

が成り立つ. 特に $\|f_{n_{k+1}} - f_{n_k}\|_p < \frac{1}{2^k}$ が成り立つ.

- $g_k(x) = |f_{n_1}(x)| + \sum_{i=1}^k |f_{n_{i+1}}(x) - f_{n_i}(x)|$ とおく. $|f_{n_1}| \in L^p(X, \mu)$, $|f_{n_{k+1}} - f_{n_k}| \in L^p(X, \mu)$ より $g_k \in L^p(X, \mu)$ であり,

$$\|g_k\|_p \leq \|f_{n_1}\|_p + \sum_{i=1}^k \|f_{n_{i+1}} - f_{n_i}\|_p \leq \|f_{n_1}\|_p + 1$$

が成り立つ。また

$$0 \leq g_1(x) \leq g_2(x) \leq \cdots \leq g_k(x) \leq g_{k+1}(x) \leq \cdots$$

が成り立つので $g(x) = \lim_{k \rightarrow \infty} g_k(x)$ は各 $x \in X$ に対して存在する。

- 単調収束定理より

$$\begin{aligned} \int_X |g|^p d\mu &= \lim_{k \rightarrow \infty} \int_X |g_k|^p d\mu, \\ \|g\|_p &= \lim_{k \rightarrow \infty} \|g_k\|_p \leq \|f_{n_1}\|_p + 1 \end{aligned}$$

を得る。したがって $|g(x)|^p$ つまり $|g(x)|$ は $|g(x)| < \infty$ a.e. $x \in X$ を満たす。さらに $g \in L^p(X, \mu)$ である。

- $\lim_{k \rightarrow \infty} g_k = |f_{n_1}| + \sum_{i=1}^{\infty} |f_{n_{i+1}} - f_{n_i}|$ は a.e. $x \in X$ で存在するので $f_{n_k} = f_{n_1} + \sum_{i=1}^{k-1} (f_{n_{i+1}} - f_{n_i})$ は a.e. $x \in X$ に対して絶対収束することになる。つまり a.e. $x \in X$ に対して $f(x) := \lim_{k \rightarrow \infty} f_{n_k}(x)$ が存在する（収束しない場所では $f(x) = 0$ とすればよい）。このとき f は μ -可測である。さらに

$$|f_{n_k}(x)| \leq g_k(x) \leq g(x)$$

そして $|f(x)| \leq g(x)$ (a.a. $x \in X$) が成り立つ。よって

$$|f_{n_k}(x) - f(x)| \leq 2g(x)$$

が成り立つ。

- Lebesgue の収束定理により

$$\int_X |f(x) - f_{n_k}(x)|^p d\mu = 0 \quad \text{つまり} \quad \lim_{k \rightarrow \infty} \|f - f_{n_k}\|_p = 0$$

が成り立つ。これより $\varepsilon > 0$ にある $k_0 \in \mathbb{N}$ が存在して

$$k \geq k_0 \quad \Rightarrow \quad \|f - f_{n_k}\|_p < \frac{\varepsilon}{2}$$

が成り立つ。

- $\{f_n\}$ は Cauchy 列であるからある $n_0 \in \mathbb{N}$ が存在して $m, n \geq n_0$ ならば (6.4) が成り立つ。ここで $k \geq k_0$ を $n_k \geq n_0$ となるようにとれば $n \geq n_0$ ならば

$$\|f - f_n\|_p \leq \|f - f_{n_k}\|_p + \|f_{n_k} - f_n\|_p < \frac{\varepsilon}{2} + \frac{\varepsilon}{2} = \varepsilon$$

が成り立つ。これは $\lim_{n \rightarrow \infty} \|f_n - f\|_p = 0$ を意味する。 \square

- 以上の証明から次のことがわかる.

命題 6.5

$1 \leq p < \infty$ とする. $\{f_n\}$ を $L^p(X, \mu)$ における Cauchy 列とする. このとき, $f \in L^p(X, \mu)$ が存在して

$$(1) \lim_{n \rightarrow \infty} \|f_n - f\|_p = 0$$

が成り立つ. さらに ある $h \in L^p(X, \mu)$ と部分列 $\{f_{n_k}\}$ が存在して

$$(2) \lim_{k \rightarrow \infty} f_{n_k}(x) = f(x) \text{ a.e } x \in X$$

$$(3) |f_{n_k}(x)| \leq h(x) \text{ a.e } x \in X$$

が成り立つ.

- $p = 2$ のとき, $f, g \in L^2(X, \mu)$ に対して

$$(f, g) = \int_X fg d\mu \quad (6.5)$$

とおくと, (\cdot, \cdot) は内積の条件 (IP1)–(IP4) を満たす. さらに内積から導かれるノルムは $\|\cdot\|_2$ でありこのノルムに関して完備であるから次のことが従う:

命題 2.6

$L^2(X, \mu)$ は (6.5) を内積として Hilbert 空間となる.

6.3 L^∞ 空間

- $f: X \rightarrow \overline{\mathbb{R}}$ を X 上の可測関数とする. ある $M \in \mathbb{R}$ があって

$$f(x) \leq M \text{ a.e. } x \in X$$

が成り立つとき f は**本質的に上に有界**であるといい

$$\inf\{M : f(x) \leq M \text{ a.e. } x \in A\}$$

を f の**本質的上限**といい $\operatorname{ess\,sup}_{x \in A} f(x)$ あるいは $\operatorname{ess\,sup}_A f$ と表す. **本質的に下に有界**, **本質的下限** $\operatorname{ess\,inf}_{x \in A} f(x)$, $\operatorname{ess\,inf}_A f$ も同様に定義される.

- V を

$$\mathcal{L}^\infty(X, \mu) = \{f : X \rightarrow \overline{\mathbb{R}} : f \text{ は } \mu\text{-可測で } \operatorname{ess\,sup}_A |f| < \infty\}$$

とおく. $\mathcal{L}^\infty(X, \mu)$ において $\mathcal{L}^p(X, \mu)$ の定義で述べた同値関係 \sim を考え, 商集合 $\mathcal{L}^\infty(X, \mu)/\sim$ を $L^\infty(X, \mu)$ と表し, $[f] \in L^\infty(X, \mu)$ に対し

$$\|[f]\| = \operatorname{ess\,sup}_X |f| \quad (6.6)$$

で定義する. 以後, $f = g$ a.e. $x \in X$ である関数は同一視するという約束の下, $L^\infty(X, \mu)$ の元を f で表し, $\|[f]\|$ を $\|f\|_\infty$ と表す. 定義から

$$|f(x)| \leq \|f\|_\infty \quad \text{a.e. } x \in X$$

が成り立つ. 実際, 任意の $n \in \mathbb{N}$ に対してある $N_n \subset X$ かつ $\mu(N_n) = 0$ なる $N_n \in \mathcal{M}$ が存在して

$$|f(x)| \leq \|f\|_\infty + \frac{1}{n} \quad x \in X \cap N_n^c$$

が成り立つ. $N = \bigcup_{n=1}^{\infty} N_n$ とすると $\mu(N) = 0$ であり

$$x \in X \cap N^c \Rightarrow |f(x)| \leq \|f\|_\infty + \frac{1}{n} \quad \forall n \in \mathbb{N}$$

を得る. $n \rightarrow \infty$ とすればよい.

- $\|f\|_\infty$ がノルムの条件 (N1), (N2), (N3) を満たすことを見よう.
- (N1) は明らか.
- (N2) を示す. $\alpha = 0$ ならば明らかである. $\alpha \neq 0$ とする. このとき

$$|\alpha f(x)| = |\alpha| |f(x)| \leq |\alpha| \|f\|_\infty \quad \text{a.e. } x \in X$$

である. よって $\|\alpha f\|_\infty \leq |\alpha| \|f\|_\infty$ が成り立つ. 逆に $|f| = \left| \frac{1}{\alpha} \alpha f \right|$ であるから先に示したことから

$$\|f\|_\infty \leq \frac{1}{|\alpha|} \|\alpha f\|_\infty$$

つまり $|\alpha| \|f\|_\infty \leq \|\alpha f\|_\infty$ を得る.

- (N3) を示す. $f, g \in L^\infty(X, \mu)$ とする. このとき $N_1, N_2 \subset A$, $\mu(N_1) = \mu(N_2) = 0$ なる $N_1, N_2 \in \mathcal{M}$ が存在して

$$\begin{aligned} |f(x)| &\leq \|f\|_\infty \quad x \in X \cap N_1^c, \\ |g(x)| &\leq \|g\|_\infty \quad x \in X \cap N_2^c \end{aligned}$$

を得る. $N = N_1 \cup N_2$ とすると $\mu(N) = 0$ であり $x \in X \cap N^c$ ならば

$$|f(x) + g(x)| \leq |f(x)| + |g(x)| \leq \|f\|_\infty + \|g\|_\infty$$

よって $\|f + g\|_\infty \leq \|f\|_\infty + \|g\|_\infty$ を得る.

定理 6.7

$L^\infty(X, \mu)$ は $\|\cdot\|_\infty$ をノルムとして Banach 空間となる.

証明

- $\{f_n\}$ を $L^\infty(X, \mu)$ の Cauchy 列とする：任意の $\varepsilon > 0$ に対し、ある $n_0 \in \mathbb{N}$ が存在して

$$m, n \geq n_0 \Rightarrow \|f_m - f_n\| < \varepsilon$$

- $k \in \mathbb{N}$ に対して、ある $n_k \in \mathbb{N}$ が存在して

$$m, n \geq n_k \Rightarrow \|f_m - f_n\| < \frac{1}{2^k}$$

が成り立つ。このことから、任意の $k \in \mathbb{N}$ に対して、ある $n_k \in \mathbb{N}$ が存在して、 $m, n \geq n_k$ に対して $\mu(N_{k,m,n}) = 0$ なる $N_{k,m,n} \subset A$ が存在して

$$m, n \geq n_k \Rightarrow |f_m(x) - f_n(x)| < \frac{1}{2^k} \quad x \in X \cap N_{k,m,n}^c$$

が成り立つ。

- $N = \bigcup_{k \in \mathbb{N}} \bigcup_{m, n \geq n_k} N_{k,m,n}$ とすれば $\mu(N) = 0$ であり、任意の $x \in X \cap N^c$, $k \in \mathbb{N}$, $m, n \geq n_k$ に対して

$$|f_m(x) - f_n(x)| \leq \frac{1}{2^k}$$

が成り立つ。任意に $\varepsilon > 0$ をとれば $\frac{1}{2^k} < \varepsilon$ となる k が定まり、そこから n_k が定まり、

$$m, n \geq n_k \Rightarrow |f_m(x) - f_n(x)| < \varepsilon \quad (x \in X \cap N^c) \quad (6.7)$$

が成り立つ。これは、任意の $x \in X \cap N^c$ に対して実数列 $\{f_n(x)\}$ は Cauchy 列であることを意味する。

- したがって各 $x \in A \cap N^c$ に対して $f(x) = \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x)$ が定まる ($x \in N$ に対しては $f(x) = 0$ とする)。 (6.7) で $m \rightarrow \infty$ とすれば

$$n \geq n_k \Rightarrow |f(x) - f_n(x)| \leq \varepsilon \quad (x \in X \cap N^c) \quad (6.8)$$

が成り立つ。このとき

$$|f(x)| \leq |f(x) - f_{n_k}(x)| + |f_{n_k}(x)| \leq \varepsilon + \|f_{n_k}\| \quad (x \in X \cap N^c) \quad \text{つまり a.e. } x \in X$$

である。よって $f \in L^\infty(X, \mu)$ である。また (6.8) より $\lim_{n \rightarrow \infty} \|f_n - f\| = 0$ もわかる。□

- 命題 6.2 の系として次を得る：

命題 6.8(Hölder の不等式)

$1 \leq p, p' \leq \infty$ は $\frac{1}{p} + \frac{1}{p'} = 1$ を満たすとする．ただし $\frac{1}{\infty} = 0$ とする． $f \in L^p(X, \mu)$, $g \in L^{p'}(X, \mu)$ とすると

$$\int_X |fg| d\mu \leq \|f\|_p \|g\|_{p'}$$

が成り立つ．

6.4 Lebesgue 空間の性質と変分法の基本補題

- ここでは Lebesgue 空間のいくつかの性質について証明なしで述べる．
- $\Omega \subset \mathbb{R}^N$ を開集合とし， $C(\Omega)$ を Ω で連続な関数とする． $f \in C(\Omega)$ に対して

$$\{x \in \Omega \mid f(x) \neq 0\}$$

の \mathbb{R}^N における閉包を f の台といい， $\text{supp} f$ と表す．さらに

$$\{f \in C(\Omega) \mid \text{supp} f \subset \Omega \text{ で } \text{supp} f \text{ は有界閉集合}\}$$

$C_c(\Omega)$ と表す．

- 以後， m を Lebesgue 測度とし，測度空間を $(\Omega, \mathcal{B}(\Omega), m)$ としたときの L^p 空間を $L^p(\Omega)$ と表し， $f(x)$ の積分について dm を dx と表す．
- 次の2つのことが知られている：

定理 6.9

$\Omega \subset \mathbb{R}^N$ を開集合， m を \mathbb{R}^N における Lebesgue 測度， $1 \leq p < \infty$ であるとき $C_c(\Omega)$ は $L^p(\Omega)$ において稠密である．

定理 6.10

$\Omega \subset \mathbb{R}^N$ を開集合， m を \mathbb{R}^N における Lebesgue 測度， $1 \leq p < \infty$ とする．このとき $L^p(\Omega)$ は可分である．

- 定理 6.9 を用いると次のことがわかる．

定理 6.11

$1 \leq p < \infty$ とし, $f \in L^p(\mathbb{R}^N)$ とする.

$$\lim_{|h| \rightarrow 0} \int_{\mathbb{R}^N} |f(x+h) - f(x)|^p dx = 0$$

が成り立つ.

証明**Step 1: $f \in C_c(\mathbb{R}^N)$ の場合**

- $f \in C_c(\mathbb{R}^N)$ とすると $K := \text{supp } f$ は \mathbb{R}^N のコンパクト集合である.

$$K_1 := \{x \in \mathbb{R}^N \mid \text{dist}(x, K) \leq 1\}$$

とおくと K_1 も \mathbb{R}^N のコンパクト集合である.

- $|h| \leq 1$ とすると $\text{supp}(f(\cdot + h) - f(\cdot)) \subset K_1$ であり, f は K_1 で一様連続である.
- $\varepsilon > 0$ を任意にとると, f の一様連続性からある $0 < \delta < 1$ があって

$$x \in K, |h| < \delta \Rightarrow |f(x+h) - f(x)| < \frac{\varepsilon^{1/p}}{(m(K_1) + 1)^{1/p}}$$

が成り立つ. よって $|h| < \delta$ ならば

$$\int_{\mathbb{R}^N} |f(x+h) - f(x)|^p dx = \int_{K_1} |f(x+h) - f(x)|^p dx \leq \varepsilon$$

を得る. Step 1 終了

Step 2: $f \in L^p(\mathbb{R}^N)$ の場合

- 任意に $\varepsilon > 0$ をとると, 定理 2.9 より,

$$\|f - g\|_p < \frac{\varepsilon}{2}$$

を満たす $g \in C_c(\mathbb{R}^N)$ が存在する.

- 次に三角不等式と Lebesgue 測度の平行移動不変性により

$$\begin{aligned} \|f(\cdot + h) - f(\cdot)\|_p &\leq \|f(\cdot + h) - g(\cdot + h)\|_p + \|g(\cdot + h) - g(\cdot)\|_p + \|g - f\|_p \\ &= \|f(\cdot) - g(\cdot)\|_p + \|g(\cdot + h) - g(\cdot)\|_p + \|g - f\|_p \\ &\leq \varepsilon + \|g(\cdot + h) - g(\cdot)\|_p + \|g - f\|_p \end{aligned}$$

Step 1 より $\lim_{h \rightarrow 0} \|g(\cdot + h) - g(\cdot)\|_p = 0$ であるから

$$\limsup_{|h| \rightarrow 0} \|f(\cdot + h) - f(\cdot)\|_p \leq \varepsilon$$

を得る.

- $\varepsilon > 0$ は任意より, Step 2 は終了し, 証明が完了する. \square

定理 6.12

$\Omega \subset \mathbb{R}^N$ を開集合, m を \mathbb{R}^N における Lebesgue 測度, $1 \leq p < \infty$ とし, $f \in L^p(\Omega)$ とする.

$$\int_{\Omega} f \varphi dx = 0 \quad (\forall \varphi \in C_c(\Omega))$$

が成り立つならば $f(x) = 0$ a.e. $x \in \Omega$ が成り立つ.

証明

Step 1: $1 < p < \infty$ の場合

- $f \in L^p(\Omega)$ と $p' = p/(p-1)$ より $|f|^{p-2}f \in L^{p'}(\Omega)$ である. 定理 2.9 より

$$\varphi_n \rightarrow |f|^{p-2}f \quad (n \rightarrow \infty) \quad \text{in } L^{p'}(\Omega) \quad (6.9)$$

となる $\{\varphi_n\} \subset C_c(\Omega)$ が存在する.

- 仮定から

$$\int_{\Omega} f \varphi_n dx = 0 \quad (n = 1, 2, \dots)$$

が成り立つ.

- 一方, Hölder の不等式より

$$\begin{aligned} \left| \int_{\Omega} f \varphi_n dx - \int_{\Omega} |f|^p dx \right| &= \left| \int_{\Omega} f(\varphi_n - |f|^{p-2}f) dx \right| \\ &\leq \|f\|_p \|\varphi_n - |f|^{p-2}f\|_{p'} \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty) \end{aligned} \quad (6.10)$$

を得る.

- 以上 (6.9), (6.10) より

$$0 = \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\Omega} f \varphi_n dx = \int_{\Omega} |f|^p dx$$

つまり $f = 0$ a.e. $x \in \Omega$

Step 2: $p = 1$ の場合

- $\Omega_n \subset \mathbb{R}^N$ を

$$\Omega_n := \{x \in \Omega \mid |x| < n, \quad \text{dist}(x, \partial\Omega) > 1/n\}$$

とおくと, Ω_n は有界開集合で, $\Omega = \bigcup_{n=1}^{\infty} \Omega_n$ が成り立つ.

- Ω_n は有界開集合なので $f \in L^q(\Omega_n)$ $1 < q < \infty$ である (確かめよ) .
- 仮定から任意の $\varphi \in C_c(\Omega_n)(\subset C_c(\Omega))$ に対して

$$\int_{\Omega_n} f\varphi dx = 0$$

が成り立つ.

- 前半より $f = 0$ a.e. $x \in \Omega_n$ である. 以上より $f = 0$ a.e. $x \in \Omega$ が成り立つ. \square
- $\Omega \subset \mathbb{R}^N$ とする. $\omega \subset \Omega$ となる任意の有界開集合 ω に対して $f \in L^p(\omega)$ となるような関数全体を $L^p_{\text{loc}}(\Omega)$ と表す. 変分法の基本補題は $f \in L^p_{\text{loc}}(\Omega)$ に対して成り立つ.